

難民の子供たちの幸せ願って

レバノン・パレスチナ難民施設を訪問

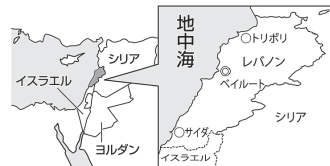
ゆめポッケ

親子ボランティア隊 同行

3月25日から4月1日まで「ゆめポッケ親子ボランティア隊」(隊長 佐佐木 也越後川口教会長)の一行24人がレバノンを訪れた。地中海東岸に位置する同国には、64年前に故郷を追われたパレスチナ難民とその家族が今も厳しい環境下で生活している。一行は同国の小学校や幼稚園8カ所を訪問。本会の少年部員、学生部員が作成したポッケを子供たちに手渡し、一人ひとりの幸せを願いながら、共に交流のひとつを奏した。

厳しい生活環境の中で

パレスチナ難民とは、1948年のイスラエル建国とその後の中東戦争でパレスチナの地を追われたアラブ人を指す。パレスチナ暫定自治区(ガザ、ヨルダン川西岸)のほかレバノン、シリアなどの近隣諸国で避難生活を送るパレスチナ難民は440万人。中でも、レバノンでは市民権を得られず厳しい生活環境下に置かれている。かつて貿易の中心地として繁栄したレバノンには、イスラームとキリスト教、ユダヤ教など10以上の宗教・宗派が混在する。同国はこれまで、宗教・宗派の人口比で国会議席を配分するなど、国家運営に苦慮してきた。75年から15年間に及んだキリスト教徒とイスラームの戦闘など宗教間の対立による紛争がたびたび発生。このため、レバノン



れ、もはや過密状態だ。市民権のない難民は土地の取得も認められず、職業も制限されるなど将来の展望を見いだせない生活が続いている。こうした状況を考慮し、本会は9年からレバノンでパレスチナ難民へのポッケの配付活動を展開。これまでに23万個以上のポッケが子供たちに届けられている。今回も、UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)と現地NGO(非政府機関)のNISCVT(社会福祉

愛情が育む「平和」

「ゆめポッケ親子ボランティア隊」の一行は日本からアラブ首長国連邦を経由し、約18時間かけてレバノンの首都・ベイルートに到着。高層ビルやマンションの立ち並ぶ都会的な街並みが一行の目を引き、過去のたび重なる紛争の傷痕は見当たらず、平穏な雰囲気ではあるが、街の様子に注意を払う軍人の手には機関銃がつけられている。配付初日の3月27日、一行はベイルートから約40キロ南にあるアインヘルワ難民キャンプを訪ね、UNRWAが運営する小学校では、1年生31人が待つていた。

「マルハバ(こんにちは)」。隊員たちがアラビア語であいさつすると、子供たちから「サンキュー」



ちから手紙や造花が隊員一人ひとりに贈られた。隊員たちは笑顔で声をかけながら、ポッケを手渡した。子供たちはポッケを大事そうに抱きしめたり、友達に中身をよせ合ったりしながら、うれしそうな表情を浮かべた。中には早速、折り紙で遊び始める子どももいた。



訪問先の幼稚園、小学校で『世界がひとつになるまで』を合唱し、子供たちと交流した

皆で幸せに暮らす世界を

28日から30日まで、NISCVTが運営する6カ所の幼稚園で配付を行った。ベイルートの北約90キロにあるトリポリのバワイ難民キャンプのバワイ幼稚園、隊員たちは子供と目録の高さを比べ、握手したり、抱きしめたりしてポッケを手渡した。その姿を教員のルシン・アル・ルーベニさん(27)は、「子供たちがこんな喜ぶ姿はなかなか見られませんが、東日本大震災という大変な中、レバノンに來たことがここに感謝します」とほほえんだ。



積み木のように垂直方向に増築された難民キャンプ。人口は増え続け、居住空間はもはや限界状態だ(ボルジュ・シェマール難民キャンプ)

●参加者の声●

さん(13) 面沼教会 二

ポッケを受け取った子供がうれしそうな顔をじて中を見ていました。毎回こんな表情が生まれているんだと知り、活動に取り組んで本当に良かったと感じました。戦争などで傷ついた子供たちが笑顔になることを祈って、これからもポッケを作りたいと思います。また今回、子供たち

さん (47) 目黒教会 二

パレスチナ難民の家庭を訪問させて頂き、困窮する生活状況や先の見えない将来への不安を知りました。そんな中、難



レバノンの8カ所でポッケを配付。子供たちの笑顔がいつまでも続く平和な世界を願った (ボルジュ・シェマール難民キャンプのバイト幼稚園)

